

オツベルと象

宮沢賢治

……ある牛飼いがものがたる

だいいちにちよう
第一日曜

オツベルときたら大したもんだ。稲扱器械の六台も据えつけて、のんのんの
のんのののんと、音をたててやっている。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきりまっ赤にして足で踏んで器械をま
わし、小山のように積まれた稲を片っぱしから扱いて行く。藁はどんどんうし
ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、靱や藁から発ったこ
まかな塵で、変にぼうっと黄いろになり、まるで沙漠のけむりのようだ。

そのうすくらい仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹殻
を藁に落さないよう、眼を細くして気をつけながら、両手を背中に組みあわせ
て、ぶらぶら往ったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、何せ新式稲扱器械が、
六台もそろってまわってるから、のんのんののんふるうのだ。中にはいると
そのために、すっかり腹が空くほどだ。そしてじっさいオツベルは、そいつで
じょうず 腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらいのビフテキだの、雑巾ほど
あるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。
とにかく、そうして、のんのんののんやっていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象しろぞうがやって来た。白い象しろぞうだぜ、ペンキを塗ぬったのでないぜ。どういふわけきで来たかって？ そいつは象ぞうのことだから、たぶんぶらっと森もりを出でて、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋こやの入口いりぐちに、ゆっくり顔かおを出だしたとき、百姓ひやくしやうどもはぎょっとした。なぜぎょっとした？ よくきくねえ、何なにをしだすか知しれないじゃないか。かかり合あっては太たいへんだから、どいつもみな、いっしょうけんめい、じぶんの稲いねを扱こいていた。

ところがそのときオツベルは、ならんだ器械きかいのうしろの方ほうで、ポケットに手てを入れながら、ちらっと鋭するどく象ぞうを見た。それからすばやく下したを向むき、何なんでもないとふうで、いままでどおり往いったり来きたりしていたもんだ。

するとこんどは白象しろぞうが、片脚床かたあしゆかにあげたのだ。百姓ひやくしやうどもはぎょっとした。それでも仕事しごとが忙いそがしいし、かかり合あってはひどいから、そっちを見みずに、やっぱり稲いねを扱こいていた。

オツベルは奥おくのうすくらいところで両手りやうてをポケットから出だして、も一度ちらっと象ぞうを見た。それからいかにも退屈たいくつそうに、わざと大きなあくびをして、両手りやうてを頭あたまのうしろに組くんで、行いったり来きたりやっていた。ところが象ぞうが威勢いせいよく、前肢まえあしふた二つつきだして、小屋こやにあがって来ようとする。百姓ひやくしやうどもはぎくつとし、オツベルもすこしぎょっとして、大きな琥珀おほこはくのパイプから、ふっとけむりをはきだした。それでもやっぱりしらないふうで、ゆっくりそこらにあるあっていた。

そしたらとうとう、象がのこのこ上^{のぼ}って来た。そして器械^{きがい}の前^{まえ}の^{のんき}ところを、呑気^{のんき}にあるきはじめてのだ。

ところが何^{なに}せ、器械^{きがい}はひどく廻^{まわ}っていて、靱^{もみ}は夕立^{ゆうだち}か霰^{あられ}のように、パチパチ象^{ぞう}にあたるのだ。象^{ぞう}はいかにもうるさいらしく、小さな^{ちい}その眼^めを細^{ほそ}めていたが、またよく見^みると、たしかに少^{すこ}しわらっていた。

オツベルはやっと覚^{かくご}悟^ごをきめて、稲^{いね}扱^{ごき}器械^{きがい}の前^{まえ}に出^でて、象^{ぞう}に話^{はなし}をしようとしたが、そのとき象^{ぞう}が、とてもきれいな、鶯^{うぐいす}み^みたいないい声^{こえ}で、こんな文^{もん}句^くを云^いったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂^{すな}がわたしの歯^はにあたる。」

まったく靱^{もみ}は、パチパチパチパチ歯^はにあたり、またまっ白^{しろ}な頭^{あたま}や首^{くび}にぶつつかる。

さあ、オツベルは命^{いのち}懸^かけた。パイプを右^{みぎ}手^てにもち直^{なお}し、度^ど胸^{きょう}を据^すえて斯^こう云^いった。

「どうだい、此^{ここ}処^{ところ}は面^{おも}白^{しろ}いかい。」

「面白^{おも}いねえ。」象^{ぞう}がからだを斜^{なな}めに^めして、眼^めを細^{ほそ}くして返^{へん}事^じした。

「ずうっとこ^こっちに居^いたらどうだい。」

百^{ひやく}姓^{しょう}どもはは^はとして、息^{いき}を殺^{ころ}して象^{ぞう}を見^みた。オツベルは云^いってしま^まってから、にわか^{にわか}にがたがた^{ふる}顫^だえ出^です。ところ^{ところ}が象^{ぞう}はけろりとして

「居^いてもいいよ。」と答^{こた}えたもんだ。

「そうか。それでは^{それでは}そうしよう。そういう^{そういう}ことにしようじゃないか。」オツベルが顔^{かお}をくしゃくしゃにして、まっ赤^かにな^なって悦^{よろこ}びながら^い云^いった。

どうだ、そうしてこの象^{そう}は、もうオツベルの財産^{ざいさん}だ。いまに見^みたまえ、オツベルは、あの白象^{しろぞう}を、はたらかせるか、サーカス団^{だん}に売^うりとばすか、どっちにしても^{まんえんいじょう}万円以上もうけるぜ。